

## 展覧会

# 「源氏物語 よみがえった女房装束の美」を共催して

杉浦 勉

二〇一九年三月と九月にパリ日本文化会館館長室で実践女子大学図書館長の佐藤悟教授に二度お目にかかりました。その際、実践女子大学では、佐藤悟教授を中心に私立大学研究ブランディング事業「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」という研究を進めており、その研究成果の中間発表をパリで実施したいとのご希望を伺いました。

当時私が館長をしていたパリ日本文化会館では、フランス国立東洋言語文化学院（イナルコ）やパリ・デイドロ大学（現パリ大学）などとの共催で、それまでも源氏物語に関する学術的研究発表会を行ってきました。例えば二〇一七年三月には「源氏物語を書きかえる…翻訳、注釈、翻案」というテーマで外国における源氏物語の翻訳と受容がどのようなものであるか、それぞれの国の歴史的背景とともに各国の学者が議論するシンポジウムを開催しました。

私自身、以前から源氏物語と海幸山幸の話や紅楼夢などの比較文学的な関心を寄せていましたので、装束の面や香道の面から源氏物語を深堀する佐藤教授の企画提案に大きな興味を抱きました。

佐藤教授と二度目にお目にかかってから半年後の二〇二〇年二月四日（火）から一五日（土）までパリ日本文化会館の

地上階ホールで「源氏物語と日本文化」と題するイベントが実現しました。この企画は、一三世紀鎌倉時代の『源氏物語』の書写を研究し、またできるだけ紫式部の生きた時代に近い時代の女房装束の再現や着装（衣紋道）、貴族が嗜んだ香道など、『源氏物語』を文字からだけではなく、当時の宮廷貴族の生活を踏まえながら再考していこうというものでした。厳密な時代考証を行い、『源氏物語』を立体的にとらえ、理解しようとする試みは非常に意義深いものであると思いました。

展示期間中の二月八日（土）一六時から一九時まで、満席となったホールで香道と十二単の着付けのレクチャー・デモンストレーションが開催されました。

まず古典研究者として有名な三條西実隆のご子孫である香道二十三代御宗家の三條西堯水先生による源氏香のレクチャーと観客全員が参加する聞香が開催されました。聞香の正解は「若紫」で筆者は運よく当てることができました。

続いて衣紋道高倉流二十六世御宗家高倉永佳先生による「十二単」の説明があり、その後、インターナショナル儀礼文化教育研究所の永井とも子理事長の指導のもと、実践女子大学の学生たちによるいろいろな花の形をあしらった帯締めやデモンストレーションや「十二単」の着



パリ日本文化会館での展示風景



パリ日本文化会館での源氏香の聞香

装実演が行われました。

三條西御宗家と高倉御宗家がそろって講演されることは日本でもめったにないことだそうで、お二人からの香道と衣紋道の説明を受けたフランスの観客たちは大変満足していました。とりわけ聞香に参加したり、「十二単」の着装を直に見たりする機会はフランスでは稀有なことであり、終了後も大勢の人たちが舞台の周囲に集まり「十二単」を脱衣した後の「空蟬」を鑑賞しながら余韻に浸っていました。



パリ日本文化会館での装束着装デモンストレーション



着装脱衣後の〈空蝉〉

翌週の二月一日（火）には、ちょうどパリをご訪問されていた寛仁親王妃信子殿下が、パリ日本文化会館に御成りになり、地上階ホールで開催中の装束の展示を御視察なされました。

このパリでのイベントを終えた時点では、筆者はやがて日本に帰国し、丸紅ギャラリーの開館準備をすることが既に決まっていましたので、佐藤教授も筆者も研究成果の中間発表だけでなく、研究完了成果の発表を東京で実施したいと思っていました。

二〇二〇年三月末に帰国後、佐藤教授からのお誘いもあり、コロナ（COVID-19）流行の真只中でありましたが、ズームで毎週土曜日に開催されていた研究会にオブザーバーとして参加させて頂くことになりました。

研究会では糸や撚りの研究、『栄華物語』や『今鏡』に描写された「五衣」の前身と思われる重ね色目の検討、平安から平成に至る各時代の装束に見られる重桂の枚数ならびに唐衣、表着、五衣、単等の文様の検証と見本の作成、それぞれの色目を出すための天然素材染料の考察、平安時代の日本人の身長、各装束の丈の推定、『源氏物語』「若菜下」六条院女楽の場面に描かれた明石の君の装束を想定して装束を再現すると

の方針決定、再現装束制作の工程表検討等々、毎週細部の検討が加えられました。

私が研究会に参加してから三年後の二〇二三年春に再現装束がついに完成したとの知らせがあり、五月に撮影立ち合いのために実践女子大学に伺いました。そして初めて完成装束を拝見したのですが、その時の感動はかつてないものでした。研究会で拝見していた紙に印刷した文様や色彩のサンプルでは想像できなかった、織りと色彩と風合いの見事さでした。既に二〇二三年一月に丸紅ギャラリーでの初公開が決まっていたのですが、誰も今まで目にしたことのない平安時代の女房装束の展覧会開催に胸が膨らみました。

この素晴らしい再現装束をどのように効果的に展示するか、研究グループと丸紅ギャラリーのメンバーで検討しました。これまでの着物のように衣桁に一枚一枚掛けて展示するのでは、再現装束の魅力が伝わりにくいということになり、展示ホールの中央に着装したような形で見せし、襟や袖口や裾部分の重ね色目の美しさに加え、着装して光を受け反射した時の織りの美しさを全方位からお見せしたいとの思いに収斂しました。そして今回の丸紅ギャラリーでの展覧会を監修して頂いた高倉御宗家と永井とも子先生の衣紋技術が冴えわたり、今まで見たことのない再現装束を、今まで見たことのない形で展示することができました。

会期中盤になって、NHKの日曜アートシーンやニュース番組で何回か紹介され、雑誌、新聞等のメディアにも記事や広告の形で展覧会が周知されたこともあり、来場者数が伸び続け、一月二三日の土曜日には丸紅ギャラリー開館（二〇二二年一月一日）以来最高の一日当たり一五〇〇人を超え、会期正味二四日間の累計では約一万七千人に達しました。また、お二人の宮様が展覧会に私的にお成りになりました。

今回の展示では監修者のご意向で解説文字をできるだけ少なくしたこともあり、美術館として初めて導入した視覚障碍者、一般来場者ともに鑑賞できる音声ガイドVOXXシステムへのアクセス数も累計三万回を超えました。更に、



完成した平安女房装束の、左から順に、単、重袷、小袷、表着の色と風合い

増刷した図録も会期を4日残して売り切れとなり、来場者の知りたい、分かりたい、感じたい、浸りたい、という要望の強さを改めて実感することになりました。

今回の展覧会が多くの人の関心を惹きつけたのにはキービジュアルの素晴らしさも多分に影響していたと思います。撮影のタケミアートフォトス様、デザインの馬面デザイン室様、製作のアルボリート様、印刷の東京印書館様、再現装束を実際に着装された御方様にこの場をお借りして、深く御礼申し上げます。そして実践女子大学と



丸紅ギャラリーでの着装した状態で展示された明石の君の装束

丸紅株式会社の関係者の皆様、研究会に参加されていた先生方、丸紅ギャラリーの同僚に重ねて感謝の意を表したいと思います。

研究会の皆様によれば、この装束研究は緒についたばかりとのこと、今後の源氏物語の立体的研究の進化と関心の高まりを期待して止みません。

(丸紅ギャラリー館長)